VOICE

沙由

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

VOICE

【コード】

N5360N

【作者名】

沙由

【あらすじ】

あるところに、声に見せられた少女がいた。ただ、ひきこもり。外の世界を知ろうせず、外に出なくなっただけから一年がたった。でも、あるきっかけによって彼女の才能の花は少しずつ開き始める。外の世界への一步を彼女は踏み出せるのか！？

ぶらぶらおぐ(前書き)

ある少女の伝説がここにはじまる

ぶろろあく

少女は目を輝かしてテレビを見つめる。そのテレビでやっている内容は、少女戦士が悪い奴を魔法でやつつけるという、どう考えても幼稚園せいを対象にしたような内容であった。

それでも、小学生くらいの少女はそのアニメを見つめていた。

彼女はもちろん本当は魔法なんてないし、少女戦士なんてありえないことは知っていた。だけど、知っていた上で彼女は目を輝かしていた。

「この子の声ってなんでこんなに綺麗なんだろう？ それに、口の動きと声がぴったりあって本当にこの子が喋ってるみたいだし。こっちの子だって、声が見た目にぴったり過ぎる。なんで、こんなことできるの？ 声優さんって……」

少女は一つ息を吸ってみる。そうしてから、呟くのだ。

「すごい」

とたった一言。

でも、もっとすごかったのはその後の動揺である。

普通の子どもなら興味を持たないEDの名前の羅列。それを見て、少女は驚く。否、驚くとかの域ではない。これはまさしく驚愕というほうが正しいであろう。彼女はありえないと呟く。アニメの中の少女戦士のように。

「どうして！？ 声優さんが代わっているのに声は全然変わらないの？ なんでこんなに同じなの！？」

彼女は綺麗な声にあこがれていた。

ぶろろおぐ（後書き）

新しいのをやらせていただくことになりました「沙由」です。
浄化とは雰囲気はまるつきり違う方向で行きたいと思えます。

以後、よろしくおねがいたします。

一声 オフ会 の ? (前書き)

伝説は小さなことから始まる。

一声 オフ会 の ？

ジリジリと午前八時、歩の部屋の目覚まし時計は鳴り響いていた。でも、歩がまったく起きる気配は無い。この時間なら普通の小学生は学校に行くために起きなきゃいけないのに。ここで起きなければ遅刻してしまうのだから。

その五分後。いよいよ時間が迫ってくる。でも、お母さんが起こしにくる気配さえも全くない。だけど、そんなの歩には関係なかった。なにせ歩は学校に行っていないのだから。

というわけで、歩の起床時間は八時半と決めている。が、決めているのと現実とはあくまで絶対に同じわけは無く、

「ふあああつああ、学校いかなきゃって行きたくないな。休んじやお。よっし二度ね」

歩はいつもそれより早く起きるけど、二度ねする。それが歩にとっての日常であった。

でも、歩は実は二度寝が苦手だったりする。毎朝二度寝にチャレンジしているけど五分くらい経つと結局起きてしまうのだ。人には向き不向きがある。使い方が間違っている気がするが、そこは関係ない。話の本筋とはまるっきり関係ないのだから。

だから、歩はいつも八時十分ごろに起きていたりする。極めて健康的だと思う。

でも、その後から早速学校に行っていないことの不健康さの伺える行動に出る。歩は起きたらすぐにパソコンの置いてあるデスクの

方に向う。そして、電源いれ立ち上げる。

その微かな時間の間に朝ごはんを食べようと、自分の部屋のドアを小さくあけ、トレイに載せられラップをかけられた朝ごはんを回収し、昨日の夜ご飯を同じ場所においてとにかく食べる。

ついでにこの間歩はパジャマ姿で顔も洗っていない。しかも、そのパジャマは三日間着っぱなしだったりする。

「はー、なんでこんなまずいご飯しか作れないんだろう？ お母さん」

歩は寂しそうに呟く。冷たいご飯を口いっぱいにはおぼりながらどこか泣きたげに見える。

まずいといったもののただとにかく歩はご飯を口に運ぶ。味噌汁も飲み込むし、大根の煮つけだって味わいながら食べている。おいしいといいたげに。

それなのに歩は「まずいよ。まずい」と呟きながらご飯を食べる。一粒も残さないように
「だけど、そんな時間も短く。またパソコンに向き合う。」

パソコンにはまだ幸せだった頃かっつ貰ったイヤホンがついている。そして、無料動画をただ聞いている。画面は見ないで。時々「この人の声、高い」「あつ発音の仕方悪いよこのひと」「これ多分ゲスト出演してる人だな」などと、呟きながら。

たまに、セリフを自分でも言ってみたりしている。でも、そのたびに顔をしかめて「こんなの違う」と歩は呟く。

自分に敵しいのかもしれない。

そして、その後は適当な掲示板を回っている。基本的にアニメとかドラマ関連のもの。声優さんについてのところも多い。

で、最後に「shiger」という名のSNS。最近は「声優LOVE」というサークルに入っていていよいよここを見ることも増えた感じだ。その時、メールという項目に目が留まった。

実は、歩はメール機能を利用したこともないしこの後も利用しないだろうと、基本的にそこについては無視することに決めていた。でも、なんか今日だけは例外だった。

(ちょっとだけ見るくらいなら、メールにはまりすぎたりもしないよね？ 大丈夫。ちょっとだけ)

歩はメールというところをクリックする。すると、ある一件のメールの内容が目に残る。

《こんにちは。秋です》

タイトルにはただそう書いてある。でも、地味なところが余計に歩の心を誘うし、秋はこのSNSの中で一番歩と仲がいい人だったりする。だから、そのお陰もあって歩の文を読むスピードはだんだんと速くなっている。

《歩さんは何時もはメールは読まないの送らないでとっています。ですが、メールでしか書けない事なのでメールします。歩さん、今度オフ会しませんか？ 折角だし、あのサークルの中の四人くらい……そうだな僕と君と鈴李と聖徒でも。実は、もう他の2人にはメールしてOKを貰っています。歩さんはどうしますか？ 返事を待

つてます。 P・S オフ会とはパソコンを使わず実際に会うことをいいます》

「オフ会か……」

歩は呟く。机に自然と肘をつきその手の上にあごを乗せて考える。

(会ってみたい気もするんだよね。でも、ちょっと怖い)

このSNSではオフ会は禁止されている。何かの犯罪に巻き込まれる危険性があるからだ。それはもちろんの話で、歩はできるだけ危ないことをしたくなかった。でも、それ以上に歩は外に出るのが怖かった。それは浅い意味ではなく、もっとずっと深い意味で。

(でも、会いたい。秋とかのこと知りたい)

歩は家を出ることができない。兄の協力がないと。それに、外でも知り合いにあつたらもう終わり。そんなリスク、危ないことのために犯せるはず無かったのだ。でも、歩は返信ボタンを押してメールを打ち始める。

そのメールは断りのメールではなかった。

《秋さん、お誘いしてくれてありがとうございます。私もオフ会に参加したいと思います。場所と時間、早く決めて早く会いたいです。》

歩はそううつと最後にタイトル欄に《うーん、そうですね……》

と、打ち込み送信ボタンを押した。

一声 オフ会 の？（後書き）

オフ会ですね。

自殺オフとありますが、まあ、そういうのはさすがにないです。

血は舞わせません！ 何とんでも前面死守（笑）

一声 オフ会 の ? (前書き)

ただ、本人にとっては些細ではない場合が多い。

一声 オフ会 の ？

歩がメールの返信をすると、秋からはまたすぐに返信が送られてきた。では、早速いろんなことを決めていこうと。

そのメールを受けた時から、歩の気持ちは大分軽くなり笑顔の時も増えてくる。歩はオフが楽しみで楽しみでたまらなかつた。

すると自然とメールボックスを確認する回数も増えてくるのを確認するたびにどんどん笑顔は増していった。そして、歩はメールを読むたびに考える。それは、あつたら何しようかということからどんな人なんだろうということまで。歩の胸は期待と希望で膨らんでいた。

でも、その幸せな時は簡単に終わってしまった。否、終わったのではない。ただ幸せな時間がちょっと途切れてしまっただけなのだ。

歩の幸せがパソコンの中の人と話すとすると、歩の幸せじゃないことは現実の家族や知り合いと話すとだ。でも、歩はもう半年以上親とは話していない。なら誰かというと、兄弟……つまりたった一人の兄弟の兄の進であった。

正直、歩は現実の人の中で一番まじだと思っっている相手は兄であった。家族のこともクラスメイトのことも大嫌いで話したくないと思っっているが、例外が二人いる。

その2人のうちの一人が進だった

理由は簡単、どんなことでも手伝ってくれるから。ただし、進の言う条件をのめばの話だけだ。

確かに歩は兄の進が大嫌いである。むしろ他の家族の三十倍はだ
いっ嫌いである。でも、嫌いだから話したくないとか言ってられな
い相手なのだ。尤も、兄とは認めてないけど。

「こんなの兄貴じゃない。ただの取引相手」

これが歩本人の言い分である。

そして、今回もまた進とは歩は取引しなければならぬ、話さな
ければならない。オフに出かけるために家をこっそり抜け出さな
いといけない。歩は普通にこの家を出ることができないから。だ
から、歩は憂鬱なのだ。

(また進と話すくらいなら、取引とか止めにして脱走しちゃおうか
な？ でも、それじゃすぐばれちゃうし、場所だって携帯のGPS
で簡単に分かっちゃうし。やっぱり進にたのまなきゃ……。嫌だ
なあ。あの人がまだ普通の兄だったらよかったんだけど)

歩は一つ大きなため息をつく、パジャマ姿からピンクのワンピースに着替え進の部屋へと歩き出した。

(進、今日はきつと学校サボってるよね？ 木曜日だし)

「進、また頼み事していい？」

歩は進の部屋の扉の前に立つと、下に聞こえないくらいの小さな
声で、それでも部屋の中には聞こえるくらいの声で呟く。すると、
進は扉をゆっくりと開けてまた中に引っ込んでしまった。中に入っ
て話せの合図である。

歩は中に入ると音をたてずに扉を閉め部屋のと真ん中にしかれた

クッション（座布団）の上に座った。

「歩、久しぶり。今日はどうした？」

いい兄ぶるように進は私の目線にあわせてしゃがむ。金髪のさらさらした髪がすこし揺れる。

（また、髪違う色に染めてる。この前まで銀だったくせに）

「別に、頼みごとがあっただけ」

「歩は素直じゃないなあ」

からかうように進は歩の髪をぐしゃぐしゃとなでる。歩は嫌がるように少しのけぞる。

「で、どういう他の見事なの？」

あくまでもいい人そうな笑みを浮かべたまま進は歩むに聞く。笑顔だとやはり格好よく見えることが歩はちょっといらつく。

（こいつ、この笑顔で一体何人だましてんだろう？ はー、性格最悪なんだけど見た目にだまされちゃうんだよね）

「今度の日曜日の十時から六時、出かきたいの。だから、私の脱走を手伝って」

歩はつつけんどんにそう答えると、進のほうから目を逸らす。

「わかった。んじゃ、今回の見返りは……これでどう？」

進の手にはいつの間にかバレエの衣装とトゥーシューズが握られていた。サイズはちょうど歩がきれるくらいである。

歩が進のことを普通の人の三十倍嫌いな理由はこれであった。進はロリコンである。

し・か・も、

ただのロリコンじゃなく、小さな子に可愛い衣装を着せ、そしてそれを写真に収め何回も見るといっいかにも変態的な趣味を持っているのである。

妹の歩はたまったものではない。嫌いになるのは当たり前である。

さらに、その写真を目の部分だけ隠しインターネット上で売りさばいてたりするので、もう歩は進のことについては死んじやえばいいのにレベルのことを思っていた。

でも、しょうがない。これが手伝ってくれる見返りである。歩は昔から割かし物分りがよくいい子であったから、少し迷ったりはしたものの簡単にうなづき着替え始めた。

(でも、なんでこんなロリコン野郎なのにもてるのかな？ やっぱ顔がいいから？ でも、普通に何又もかけても大丈夫そうだし…。神様がいるとしたら意外と性格悪くて同属への愛が強いのかも。だって、あれだって人間という子どもに対する愛が大きすぎるから、いわゆるロリコンにしかなくてないし。うーん、そこは気になる)

正直、進の思考回路より歩の思考回路の方が謎が多い。

一声 オフ会 の？（後書き）

ロリコン兄貴登場です。

これで彼女いるって言うのは私てきには許せん！

一声 オフ会 の ? (前書き)

それでも、それを乗り越えねばならない、もしくはわそれと正面衝突しなければならぬというものだ。

一声 オフ会 の？

「進、後はヨロシクね」

「おう」

歩はオフ会当日の朝、進の部屋で最後の打ち合わせをしていた。歩としては正直、進とこんな最高な日に朝っぱらから話すなんて嫌なことではなかったけど、まあしょうがない。

この打ち合わせが無いと痛い目を見るのは歩自身なのだから。

それに、歩の部屋からは脱走ができない。

だってベランダも窓さえないのだから、歩の部屋は。そこから逆に一体どうやってたら脱走なんてできるのかって話。

というわけで、歩は脱走したい時はいつも進の部屋に行くしかなかった。

「だけどさ歩、出かけるなんて一体何処行くんだ？ 危ないところに行くのはお兄ちゃんが許さないぞ」

「否、ただのオフ会だし」

（っつておい自分。なに進に本当のことはなしちゃってるの！？ こんな奴に話しちゃうなんて調子に乗りすぎよ。気分いいからって何でも話すこと無いでしょ？）

歩はそう自分に問いかけながら大きなため息をつく。でも歩はただ沈むだけじゃない。

「じゃあ、進はこの後どうするの？ っていうか、今日何かあるでしょ？」

歩は逆に聞き返す。

歩の信条の中には『目には目薬を。歯に入歯を。質問には疑問を』というものがあるが、それを行使しているみtaiである。

尤も、なにか間違えているような違和感を覚えるような気も、しないではないが……。

「えっなんでわかるんだ？ お前エスパーか。ならスプーン曲げ……」

「できないから！ 古いから！」

「つまり君はエスパーであることは否定しないんだね？」

「あっそっちは本当」

「マジかい！？ それお兄ちゃんめっちゃびっくりなんだけど。早くマスコミに……」

「うるな！ 実の妹を。嘘だから」

「えっじゃあなんでわかったの？」

「服装」

「あ……」

その時の進の服装はTシャツにジーパンという格好であり、それは進にしては地味すぎるのだ。

否、意外にも高い身長や長い足、あと綺麗に筋肉のついているスマートな体を見せ付けるのだとしたら、それは充分すぎるほど役目を果たしているのだが、進はそういう趣味はない。

ってというか、毎日だらだらとつかえっひかえ女と四六時中デートしている進にしては、違和感を感じずに入られない格好なのだ。

何時もの進のいかにもナンパ男だみたいな格好と違いすぎて、むしろ違和感を感じるほど。

「君はきつと冷蔵庫教授レベルに頭がいいんだね」

「ってというか、君口調が悔しいほど格好いい。そして、『冷蔵庫教授』じゃなくて『レイトン教授』、最近はやりのゲーム名を泣きたいほどダサくするな！」

「こんな見た目はロリっぽくって可愛いのにいつからこんなツンデレちゃんになっちゃったんだろうか？」

「ツンデレなのは進の前だけだから！」

いい加減にしろとでも言うように歩はどなる。みんなと会うからと丁寧に結んだツインテールがぐしゃぐしゃになっていく。

尤もそのことに歩は全くきづいてないが。

「それで、今日は一体何があるの?」

「山猫族とけんか」

歩はまたまた大きなため息をつく。高校生にもなつてけんかか…
…とても言うつように。

山猫族とはヤンキーとかとにかくけんかが強い奴が集まったグループである。

ついでにその勢力の大きさは関東一ひいては東日本一と昔から言われていて、やくざの会社の檜垣組ともつながっていると噂されている。

そして、そのリーダーと日本内で唯一ためをはれるのが、進だったりする。

尤も、進はほとんどけんかはしない。それは温厚な正確だからなわけではなく、グループでつるんだりしないのでけんかしなければいけない機会が少ないだけの話である。

「けんかつて意外と体力消耗するんだぞ、馬鹿にするな!」

「否、それ当たり前だから。馬鹿にはしたけど……」

「したんかい!」

「まあそういうこと、んじゃ私は健闘を祈りながら仲良くお茶でもしながら喋ってるね」

「あ、そういえばオフ会だったんだっけ。とにかく気をつけるよ。」

実は相手は変なおっさんで、変なことをされるみたいなお事件も結構あるんだからな!」

「大丈夫。みんな信用のある人だから。自殺オフじゃあるまいし」
「あっそうそう。なんかいきなり出会って殺されたりするなよ！
もしそんなことあったら竹口家一生の恥だぞ」

「一生とか大げさな」

歩は微かに笑みを浮かべる。今までの緊張がやっとほぐされたとしても言うように。

「では、いつてきます。健闘をいのる」

歩はそういうと進の部屋の唯一の窓をあけて屋根に降りる。

そして、さらに近くにある物置の屋根を探してまた其処に降り、ポイントはその後。その場所の近くには窓があり其処からみられたら一巻の終わり。だから、その間進が親をひきつける。

「おはよ」

進のそういう声が聞こえ、まどが彼のＴシャツの色に染まる。

これは、窓の目の前が進の朝食を食べる席、其処に進が座れば自然に起きること。

チャンスは今。

歩はすぐに近くの木の枝に飛び移り、ゆっくりとおりる。

最後に、木下に予め進に用意してもらった靴を履いてこれで完了。

そして、門から出た後最寄の公園に行きポシェットの中身を確認する。

「ハンカチちり紙OK。携帯OK。あとはお菓子もOK財布もOK。よっし、いざ出陣」

歩は駅に向かって走り出した。

一声 オフ会 の ? (後書き)

なんか空間の空け方が変ですみません m () m

一声 オフ会 の ? (前書き)

ただ、正面衝突とはハイリスクハイリターンなものだと思われる

一声 オフ会 の ？

「きゃ、すみません。ごつごめんなさい。うああ」

歩が外に出るのは、友達に誕生日プレゼントを私に行くために出た時以来だから、約1年半ぶり。そんな人がもちろん外でうまくやることはできず、歩はぶつかったりならまれたりされていた。

（あーもうやだよ、外なんて……。暑いし、人たくさんだし。みんな怖いよ。そんなにかつい顔しないでよ。うー秋さんたち早く来てくれないかな？）

かわいらしいツイントールに結わえてる髪が悲しそうに垂れ下がる。この日のためにと散々迷ってから選んだ服も、ぶつかったりしているうちに（木に登ったりしてる時に）大分汚れてしまった。

といっても、無地のピンク色の半そでのワンピースにジーンズの短パン。それとヒールの無いサンダルという、いたって子どもっぽい地味な服装なのだけれど。

（そもそも、私場所間違えちゃったかな？ 時間とか間違っちゃったかな？ もしかして、みんなが私を仲間はずれに……。きつとそんなこと無いよね？ でも、やっぱり不安）

歩は時間がたつごとにどんどんと沈む。それは暑さのせいであり、

人の多さのせいでありまた、裏切られた過去から来る不安なのだろう。

まあ種明かしすると、それは彼女の心配性のせいである。集合時間より早く着すぎてしまったのだ。尤も歩はそのことに気づく気配は無いが。

その時、歩の背後に女性が立ちそして一言「歩ちゃん？」と言う。歩はというと、

（えっどうしてこの人私の名前知ってるの？ 怖いよ 都会は怖い人がいっぱいだよ。これじゃあ振り返れないよ……）

黙りこんでた。

「え、あ、ごめんなさい。人違いかな？ 鈴私、李なんだけど……」

「鈴李さん!？」

「やっぱり歩ちゃん!？」

歩はとっさに振り向く。二人の目はぴったり合う。まるで、事前に打ち合わせていたように。だが、この二人は実際に会うのはこのときが初めてでだからこそ、そのすごさが身にしみる。

「きれい」

「かわいい」

鈴李は確かにとても綺麗である。スタイルもとてもいいし、顔はどちらかというと西洋人のようで、髪は栗色で短めである。そして、なによりも茶色の憂いを秘めた澄んだ瞳が彼女をきつと美しくして

いるのだろう。ただ、その美しさはどこかはかなげであり、それがさらに鈴李の美しさを引き出していった。

まさしく絶世の美女。美しいより綺麗な人。

しかも、鈴李は服の着こなしがうまい。黒い綺麗な無地のひものワンピースの上に、薄紫色のはんそでの薄いカーデガンをまとって、それがさらに鈴李の綺麗さを引き立てていた。もう、黒いレースの日傘があまりにも悲しすぎる。

もう世界が違う。とでも言えばいいのか？　だが、彼女は確かに歩のよく知る鈴李という人であった。

「本当に、鈴李さんですよね？」

「ええ、私が鈴李。じゃあ、やっぱりあなたは歩ちゃんなのね？」

「はい。それにしても本当に綺麗ですね」

「ありがとう。何歳なの？　小学生くらいに見えるけど……」

「あっそうです、小六です。鈴李さんは？」

「うーん、何歳だと思っ？」

「高校生でしょうか？」

「そうよ。高校二年生。それよりもこんな堅苦しい言葉、止めましょ？　つかれちゃっ」

「そうですね」

「ほら、また敬語使ってる。もう」

「だって、美人のお姉さんを口説く時は敬語を使えってロリ兄貴が……」

それは嘘。進は決してそんな事をいった覚えはないはずだ。

「そんな感じで普通の言葉使お？」

鈴李は微笑む。嗚呼、字の文の私でさえ後光が見える。それはまさしく天使の微笑み、否女神の微笑といったほうが妥当。見るものを幸せにし、ついなんでも鈴李に言われれば従いたくなってしまふような……そんな笑顔。

「はい」

歩は気づかぬうちにそう返事を返し顔には満面の笑みを浮かべる。もちろん、本人はそんなこと意識の中に無く、ただ鈴李さんの笑顔に心を奪われてるだけにしか思っていない。

これはまるで催眠術。

そして、その催眠術を解いたのはあと2人のメンバーのうちの人であった。

「ん、もしかして、歩と鈴李さん？」

その残りのメンバーのうちの一人の少年、聖徒は2人が向き合っている真横からいきなり話しかけてきた。歩はすぐに言葉を返す。

「そうだけど……、なんで私だけ呼び捨て!？」

「だって、年下だし」

「じゃ、君何歳なのよ!？」

「ん？ 俺は小4だけど」

「バリバリ私より下じゃない！ 私は小6よ。ほらさん付けしなさい」

「精神年齢は俺より二歳くらい下だろばーか」
「なによ！」

歩と聖徒はお互いをにらみつけている。身長は歩のほうが大きいのでその慎重さがまた2人の苛立ち具合を上げる。

「まあ、やめなさい」

鈴李はまたやんわりと微笑んで言うことを聞かせようとするが二人はそちらに全然眼を向けないので効果が無い。鈴李はやれやれと呟きため息をついた。

だけど、会話をとめるものはいつでもかならず現れるものだ。例えば、さつき聖徒がいきなり話しかけてきたように……。

そして、その役目をやるのはもちろんあと一人のメンバー……秋に決まっている。

「すまん、おくれて」

三人に突然声をかけるものがいた。進と同じようにTシャツにジーンズ姿の少年、大体高校生くらいの少年、秋だ。とつさに三人とも声の主を探ろうとそちらにふりむく。自然とにらみ合いも終る。

そして、たつぷりためてから コマーシャル一本くらいの時間はためてから 秋は言う。

「遅くなつてすまん。俺がこのオフ会の主催者、秋だ」

そつちよつと堅苦しう言つてから秋はにっこりと笑つた。

一声 オフ会 の ? (後書き)

オフ会メンバー集合です。
人の名前多くてすみません……。

一声 オフ会 の ? (前書き)

だからこそ意味があるはずなのだ。

一声 オフ会 の？

さてさて、場所は移動して某有名ドーナツ屋の中、秋以外は三人とも席を守っていた。その時だけは、三人ともつい話すのをためらっていた。

やはり、初対面というものは話しにくいものだ。聖徒でさえも、口を閉じている。

「おい、待ったか？ はい、歩と聖徒はオレンジジュース。それで鈴季さんはコーヒー」

秋はお盆を持って席に戻ってきた。どうやら、ドーナツは買わなかったようだ。

「あつすみません、お金……」

鈴季はあわてて財布からお金を出して秋にわたそうとするが、秋は「いいって」といって笑い、その金を受け取らなかった。鈴季はすみませんというように礼をしてからコーヒーを飲む。

そんな中、歩は上がりまくっていたりする。

上がるのは当たり前。1年ぶりに外に出たと思ったら回りは知らない人ばかり（否、それは好都合なのだ）。

しかも、ジュースまでおごられてしまっている。もう逃げ出せない。歩はうつむいていた。

「さて、まず自己紹介でもするか、俺から時計回りで」

秋は顔を上げテーブルを囲んでいるメンバーを見回してから、確認するよつに言う。

「ってことは、俺・歩・聖徒・鈴季さんの順番か」
「えっ次私!？」

歩はとっさに顔を上げる。声が裏返ってしまっている。

(自己紹介なんてできっこないよ。まじめに人と話すのだから久しぶりなのに……。せめて反時計回りなら!)

なんて思いながらまた大きく歩はため息をつく。

「そうだけど、俺と同じようにやれば大丈夫。俺は秋。年は14歳の中学二年生。誕生日は八月十七日、以上。じゃ、次は歩」

秋は歩に向って笑いかけるけど、歩の顔から緊張の色は消えない。それでも歩は口を開く。

「はじめまして、歩です。年は11歳で小学六年生です。誕生日は三月二十六日です。えっと、よろしくお願いします」
歩はそう話しきると、ゆっくり息を吸ってはあーと吐いた。すると顔色もよくなり少し落ち着いてきたみたいだ。

「んじゃ、次は聖徒だな」

「嗚呼、よっ！俺は聖徒、もっともクリスマスじゃないけどな。」

年は十歳の小4だ。誕生日は秘密。特徴はこの長髪。ロングとか言ったら許さないぞ」

確かに、聖徒の髪は長かった。体つきが華奢だし顔も女の子っぽいのでたまに女子に勘違いされるが、喋り方からしてどう考えても少年でしかないが。服だって、少年の着るようなチエックのシャツに短パンでしかないし。

「最後は、鈴李さん」

「はじめまして、鈴李ともうします。年は十五歳で中学二年生です」
「えー！」

歩と聖徒はつい同時に叫んでしまう。

「高校二年生くらいかと思ってた！」

「確かに、中学生っておとなっぽ過ぎるよ！」

「そう、ありがとう。それで、誕生日は十二月九日です。得意技は催眠術。さつき歩ちゃんもかかりかけてたわよ」

「えっ本当ですか？ それって聖徒君が来る直前するとき……」

「ええそうよ、いきなりごめんね」

鈴李はにっこり優しくそうに微笑む。みんなの気はやっぱりたちまち鈴李に奪われてしまっていた。それと同時に歩はまあいいかっていう気持ちになって行く。

「なんてね？ 今のもそう。尤も、本当に催眠術ってわけでもない

んだけどね。もどきもんよ」

鈴李がそういうとみんなもそのことに気づき、笑い出す。この一つのテールは早速笑いに包まれていく。

その時はもうはじめてという緊張は、歩の心からもこのメンバー全員の心からも消えていた。

「で、今回オフ会をやるうといいだしたのは何でだと思う？」

秋はみんなを順に見て行く。歩はよくわからないからまた、ついで下を向いてしまう。

歩は学校に通っていた時も、そういうことが多かった。わからないから、できるだけ先生に指されたくない。恥をかきたくない。と思うと、歩はついつつむいてしまう。それは人間の心理としては結構自然だと思う。

そして、秋はみんなを一回見てからもう一度歩のほうを見た。歩は視線を感じ顔を恐る恐る、ゆっくりとあげていく。

「歩はわかる？」

秋はその時、一言ただそう言った。歩はその姿勢のまま固まりながらも、目だけきよるきよると右へ左へやった後、また秋のほうを見る。答えなきや駄目かと問うように。秋はこくりとうなづく。歩はこつぶをたれた。

(どうしよ。全然わかんないよ、人のことなんか……。だって進意

外と会うのなんて何年ぶり？ そんな私ができるわけないよ……。だからといってわからないなんていえるわけない)

相変わらずネガティブに歩は思いをめぐらす。だけど、結局は答えは出ず「わかりません」と歩は答えた。

「ふーん、わからないっか。そうそう、それが正しい答え。俺はその答えが聞きたかった」
「？」

歩は秋のことは結構好きであった。インターネット上であった人の中ではきつと一番だろ。さっぱりしたような性格と、面白いことも言ってくれる優しいお兄さんって言う印象があったからだ。そしてそのイメージは今も崩れてはいなかった。

が、ただこの答えにはその優しいお兄さんという印象とはいささかずれていた。

「あ、訂正。俺は歩がわからないって言う時の声がききたかったんだ。ほら、可愛い声だから」

「そんなことありません！ こんな声なんて……」

歩は叫ぶ。店の中って言うことも忘れてつい叫ぶ。

歩にとつての声というものはコンプレックス他ならなかった。歩は自分の声が大嫌いであった。だからこそ、声のことを言われると

ついいらついでしてしまう。進とも声の話をするとそんなふうな叫びあ
いになることもしょっちゅうである。

でも、秋は大人でそんなことは分かりきったように優しく笑う。

「起こった顔も可愛い」

「へ、変体！」

「……、まあ確かに可愛いって言いたくなるのもわかるかな？」

「鈴李さん！！」

「にっっ」

鈴李は声に出して笑う。 2対1……かあ、などと歩は思っ
たりするが口には出さない。

「そいつの何処が可愛いんだよ？」

「そうメント向っていわれるのも傷つく」

「おまえ、なんなんだよ」

さらに聖徒はまくし立てる。

「あれ、聖徒君が可愛く見えてきた」

「確かに」

「俺で遊ぶな！！」

何て感じで、軽く軽くオフ会は始まった。

一声 オフ会 の？（後書き）

はい、途中からネタが……って感じでした。
もうちよっとなちゃんとかえらるべきでしたね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5360n/>

VOICE

2010年11月11日06時56分発行